

## 難波西鶴

## 海之道

【61】

森田 雅也

前回は「日本永代蔵」「貞享5(1688)年刊」巻六の三「買置きは世の心やすい時」に登場する堺に住む「小力屋」という大金持ちの話でした。

「小力屋」は「長崎商人」として、「海之道」を利用して大もうけをしたのです。長崎商いには大きな資本が必要だったことは以前も書いた通りです。

ところが、彼は親譲りの大金持ちではありませんでしたから、その資本力が足りません。そこで仲間から出資金を募り、それを資本として、長崎で中国製の高

人はお金持ちになると守りに入り、守銭奴となってしまふことが多いものです。心狭いお金持ちほど、少しでもお金を使うことに財源をすり減らすような不安を覚え、疑心暗鬼にもなります。それだけに、大商人が誠実にお金を消費する人々から賞賛され、信用されたいものです。

西鶴は、「日本永代蔵」の最終章に京都に住む、誰からも愛され信用されている親子孫子三代の夫婦を描きます。それはただ、皆そ

ろって思案に暮らし、祖父の米寿祝い一家で集まっている様子でした。西鶴の理想は、こんな商家の姿に

あつたと言えるでしょう。ところがその「小力屋」ですが、その名医に対し、銀百枚(約1千円)に加えて、真鯛20把、酒1斗樽(1升瓶10本分)、酒肴1箱と

## 西鶴の理想

の御礼をしたことは前回に書きました。この名医は、結果から名医となりましたが、初めて紹介されたときは「歩行医者ながら、療治よくせらる」という程度でした。当時の名医というか、評判が良く、来院者が多くもつかっている医者は往診時などは駕籠を使っていた。

御殿医と言った殿様の治療にあたる医者にいたっては豪華な「乗物」と呼ばれる大名駕籠のような立派なものを使っていました。ですから、「歩行医者」とは貧乏医者を指しました。そこで、「小力屋」は医者に家まで買い与え、駕籠医者にまかせます。

西鶴は「この気、大分仕出し、家さかえしとなり」としますが、剛毅な商人には、成功もついてくるのですね。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

## 知恵才覚と攻めの商人